

第2 家族

【暗唱聖句】

「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな」箴言 1 章 8 節

【日曜日・最初の家族】

「エデンにおいて確立された教育の制度は、家族を中心とするものであった。アダムは神の子であった。神の子らは父なる神から教えを受けた」(教育 P26)

創世記 4 章において、カインとアベルが神様に捧げ物を捧げに行く場面が出てきます。捧げられる小羊は、イエス様を現わしていました。いったい誰がそうするように教えたのでしょうか。神様からアダムへ、そして子供たちへと教えられていったのだろうと想像することができます。ここからわかることは、最初の教育は家庭で行われるものだということです。教師は神様であり、その教えは聖書から学ぶことができます。親は聖書の教えを、子供に伝えていく義務があります。神様の愛や罪と赦し、救いの教えについてはもちろんのこと、教理や礼拝の大切さ、交わりや伝道、奉仕などについても教えていく必要があります。

『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました」コリントの信徒への手紙二 4 章 6 節

神様の栄光を悟る光を与えて下さったとあります。神様の教えを理解し、正しく教えることができるのだろうかと心配する必要はありません。

「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる」黙示録 22 : 12
神様は私たちの行いに応じて報いると言われています。どのように行うか（生きるか）は、どのような教育を受けてきたかによるところが大変大きいのです。

【月曜日・イエスの子ども時代】

イエス様の地上の両親であったマリヤとヨセフは、どのようにイエス様を教育を施していったのでしょうか。わずかな記録からわかるのは、ヨセフは正しく優しい人であったということです。マリヤがイエス様を身ごもったこと知ったとき、「夫ヨセフは正しい人であったので、マリヤのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(マタイ 1 章 19 節)と書かれています。ヨセフがマリヤの妊娠を知ったのは、主が夢でイエス様のことを伝える前だったので、他の男性との間にできた子どもだと思ったことでしょう。本当であれば、信頼を裏切られ怒っても不思議ではなかったのですが、ヨセフはマリヤを傷つけないためにそっと離縁しようと思ったのです。また、マタイ 1 章 25 節には、「男の子(イエス)が生まれるまでマリヤと関係することはなかった」とも書かれています。このことからヨセフはしっかりとした道德心を持つ正しい人物であり、正しい生き方を貫く強い意志の持ち主であったことがわかります。このことから、イエス様はヨセフから正しい生き方を学んだことでしょう。マリヤについては、天使からイエス様を身ごもることを伝えられた時、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ 1 章 38 節)と言い、主の御言葉に従順に生きる女性であったことがわかります。そして、エレン・G・ホワイトは、「イエスの母が最初の人間教師であった…天の事物について…母のひざもとで教えられた」と言っています。マリヤはイエス様に聖書の御言葉を、しっかりと教えて行きました。しかしそれと共に、神様ご自身が知識と知恵を授けていかれました。12歳の少年イエスが、過ぎ越しの祭りでエルサレムの神殿に立ったとき、一つ一つの儀式が象徴しているのは、ご自分のことであったことを悟っていきます。もっと知りたいという欲求が、迷子になってしまう原因となったのですが、心配するヨセフとマリヤをよそに、イエス様は、自分が「父の家にいるのにどうして心配するのですか」と言うのです。「父の家にいる」とは、神殿の中にいるという意味ではなく、「父なる神様の事柄の中にいる」というのが直訳です。神様の御手の中にあるとはっきり自覚しておられたのです。だから、何も恐れることがありませんでした。

【火曜日・コミュニケーション】

コミュニケーションが不足すると、良い人間関係を築くことができませんが、これは教師と生徒との間もしかりです。特に、教師は生徒の気持ちを理解し、個人的レベルでも働きかけることが大切です。その際に、きちんと聖書を学び、神様との深い交わりを築いていなければ、良い神様の感化を与えることができません。聖書には、良いコミュニケーションの取り方について、色々なことを教えています。

「神に従う人の口は知恵を生み…」(箴言 10 章 31 節) …神様に従う人に、神様は必要に合わせて知恵を与えて下さいます。時に知恵は知識以上の力を持っています。

「むしろ、愛に根ざして真理を語り…」(エフェソ 4 章 15 節) …もし愛がなければ、真理を語ったとしても相手に届きません。それは、かえってやかましい鐘のようにうっとうしいものと感じられてしまうことでしょう。

「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」(ヨハネの手紙一 3 章 18 節) …言葉だけでなく行いが伴ってこそ、相手にもしっかりと伝わります。自分自身が御言葉に生きていなければ、説得力はありません。

【水曜日・親の役割】

親には大きな責任があります。クリスチャンの親は、自らの振る舞いによってキリストと教会の聖書的手本となる道徳的義務を負っています。子育てにおいてまず大切なことは夫婦が愛し合うことです。子どもは夫婦の愛のおこぼれで育つと言う言葉があるくらいです。

「そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです」(エフェソ 5 章 28 節) 「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい」(エフェソ 5 章 22 節)

「ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです」(コリント一 11 章 3 節)

また、品位のある生活を子どもたちに示さなければなりません。親が荒々しい性格であれば、子どももそうなることでしょう。

「日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません」ローマ 13:13, 14

【木曜日・主を決して忘れないよう】

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日私が命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」申命記 6:4~9 私たちは、何を子供たちに教えるのでしょうか。それは心を尽くし主を愛することです。このことを親は自分たちが実行するだけでなく、子どもたちにも繰り返し教えなければなりません。申命記 6 章は、そのことを強く教えています。道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせ、忘れないように手に額にしるしとしてつけよ、さらに家の戸口の柱にも門にも書き記せと教えます。心を尽くし神様を愛することが、これほどまで強烈に大切なことなのだと聖書が伝えていることを思うと、そこまで強く大切なこととして意識しているだろうかと反省させられます。改めて、主を愛することを覚えたいと思います。